

平家物語における八行マ行四段動詞の音便について

著者	奥村 和子
引用	女子大文学. 國文篇 : 大阪女子大學紀要. 2005, 56, p.A1-A11
URL	http://doi.org/10.24729/00011068

平家物語における バ行マ行四段動詞の音便について

奥村和子

はじめに

中世から近世にかけて、バ行マ行四段動詞連用形の音便にはウ音便形と撥音便形が併存していた。この2つの音便形については、濱田敦氏⁽¹⁾、前田勇氏⁽²⁾、大塚光信氏⁽³⁾、辰野弘由紀氏⁽⁴⁾らの論考により、抄物、キリシタン資料等における主として語幹末母音による使い分けが指摘されている。すなわち、大塚氏のまとめるところによれば、

〔A〕語幹末がウ列音なる時——撥音便

〔B〕語幹末がアエイオ列音なる時——ウ音便

の二法則が存在していた。しかしその間に

〔a〕語幹一音節語——特に母音音節である場合——はそれぞれの原則よりはずれ撥音便となることもある。

〔b〕前項により語幹末ウ列音語でウ音便となるものはほとんど語幹二音節以上の語である。

の二傾向も存し、それは抄物よりキリシタン物において著しかった。

というものである。また辰野氏は『玉塵抄』の調査により、語幹末ウ列音の動詞は撥音便、ア列音の動詞はほぼウ音便であるが、その他の動詞についてはオ列音、イ列音、エ列音の順にウ音便化しやすいこと、すなわちウ音便化の程度に差があることを指摘し、それをキリシタン資料のような状態になる過程として捉えられた。平家物語については、青木和江氏⁽⁵⁾に天草版平家物語と原拠本の比較、江口正弘氏⁽⁶⁾に天草版平家物語と覚一本平家物語の比較、上野和昭氏⁽⁷⁾に豊川本平家正節の調査による論考がそれぞれ存する。三氏の論文のバ行マ行音便に関する結論部分を順に引用しておく。

「原拠本（引用者注・覚一本を含む）とそれを口語訳した天草版平家との関係を語幹末の母音をも考慮して示すと、次のような流れを推測できるかと思う。

	原拠本	天草版平家
語幹末の母音 aieo	ウ音便・撥音便・非音便形→	ウ音便
語幹末の母音 u	撥音便 →	撥音便」(青木氏)

「覚一本では天草版で見るように、語幹末母音がuの場合は撥音便に、aieoの場合はウ音便として用いられるという傾向は認められないと言わねばならない。ところが、この現象も天草版が作られた室町末期には語幹末母音がuのものだけが撥音便をし、他はウ音便をするように変化していったものと考えられる。」(江口氏)

「これによると、キリシタン物や抄物に比べて、語幹末がイウエオ列音の場合ではほぼ一致しているのであるが、語幹末ア列音の場合では違っている。すなわち、キリシタン物や抄物では主としてウ音便形であるのに、豊川本では撥音便形の方が多く、この点で豊川本の方が、キリシタン物や抄物よりもやや進んだ様子を見せる。」(上野氏)

これらを考え併せると、平家物語諸本について、撥音便が多かった覚一本から天草版までに語幹末ウ列音以外の動詞がほぼウ音便になり、更にそこから豊川本平家正節までに(特に語幹末ア列音動詞について)再び撥音便がふえた、ということになる。では覚一本平家物語と平家正節とを直接比較した場合に、そのような流れが見出せるのであろうか。本稿では、同系統の詞章をもち、天草版成立の時期を挟む室町初期と江戸中期にそれぞれまとめられたと考えられる覚一本平家物語と尾崎家本平家正節とでバマ行の音便について語毎に具体的な比較を行ない、その変化を見ることとする。

1、語幹末母音

まず「平家物語総索引」を用いて、覚一本平家物語(日本古典文学大系本)におけるバマ行四段動詞連用形に「て」「たり」が接続した場合の音便の有無を調査し、次に尾崎家本平家正節で対応する箇所での音便について見た。なお、覚一本で「読て」等、語尾部分が表記されていないものについてはカウントしなかったが、尾崎家本の対応する箇所での音便の有無が明らかな場合は、尾崎家本の用例としてはカウントしている。その結果を語別に示したものが文末の表である。その中から語幹末母音ごとの音便化率(「音便を起こした用例数」÷「【て】【たり】を下接する総用例数」)を抜き出すと次ページの表の如くである。

まず目立つのは、覚一本から既に撥音便のみであった語幹末エ列音以外の動詞については、全て覚一本から尾崎家本にかけてウ音便が減少し、撥音便が増加する傾向が認められることであろう。これを見る限り、全体の流れとして撥音便からウ音便へ変化した形跡は認められないが、先にも述べた如く、覚一本の後で一

語幹末		ウ音便	撥音便	非音便
ア列音	覚一本	60%	29%	11%
	尾崎家本	48%	36%	16%
イ列音	覚一本	20%	33%	47%
	尾崎家本	8%	85%	8%
ウ列音	覚一本	4%	90%	6%
	尾崎家本	0%	93%	7%
エ列音	覚一本	0%	100%	0%
	尾崎家本	0%	100%	0%
オ列音	覚一本	32%	39%	29%
	尾崎家本	30%	58%	12%
合計	覚一本	24%	59%	17%
	尾崎家本	20%	71%	9%

度ウ音便が増加し、そこから再び撥音便化の進んだものが尾崎家本に現れているとも考えられる。そこで次に個別の状況を見ることとする。

覚一本尾崎家本の両書で音便の種類が明らかであって比較の可能な用例は123例、そのうち音便の種類が両書で異なるものは17例であった。その内訳は、非音便形→撥音便5（あやしむ2、選ぶ、囲む、結ぶ）ウ音便→撥音便6（結ぶ、組む、つかむ2、揉む2）、撥音便→ウ音便4（頼む3、忍ぶ1）非音便形→ウ音便2（忍ぶ2）、すなわち、撥音便化したものが11例、ウ音便化したものが6例となる。動詞を見ると、撥音便化する動詞の語幹末がアイウオ列音にわたるのに対して、ウ音便になった語は異なり語数2（「頼む」「忍ぶ」）であって、語幹末オ列音の動詞のみである。一度ウ列音以外の動詞にウ音便化の現象が起こっているのであれば、もっと幅広い動詞の用例が見られて良さそうである。

語幹末音別に見ると、覚一本、尾崎家本ともに語幹末ウ列音とエ列音の撥音便化率が非常に高く、ウ音便化は語幹末ア列、オ列、イ列音の順に起こしやすい。すなわち、辰野氏による『玉塵抄』の調査結果と共通する傾向を持つ。氏はそこからの変化について、「(玉塵抄の) 後このウ音便化の傾向が全バ・マ行四段をおおうことになるのであろう」「全体が撥音便からウ音便化する傾向の一過程に『玉塵抄』がある、と考えられる」とされた。とすると、覚一本はもちろんのこと、江戸中期にまとめられたとされる尾崎家本もこれと同じ、すなわちキリシタ

ン資料以前の状態を示していることになる。間で一度ウ音便化の波が起こったなら、語幹末アイエオ列音の動詞のウ音便率の差はほぼ解消されたはずであり、そこから撥音便が増える際に語幹の保持等の要素が絡んだとする説を考慮すると、⁽⁸⁾むしろア列音などウ音便を避ける要素を持った動詞が先に撥音便化率を高めていることが予想されるわけだが、実際には語幹末ア列音動詞は最も撥音便化率が低いままである。辰野氏は他の抄物文献論考を考えあわせ、「必ずしも、年代が下るにしたがってウ音便形の傾向が強くみられるとは、簡単にはいえない」とも述べられたが、覚一本尾崎家本両書で共に撥音便率100%の動詞が、語幹末ウ列音のもの以外にも多く見られる（エ列音動詞はすべて、他に「挟む」「並ぶ」「悲しむ」「臨む」「喜ぶ」「及ぶ」等）ことをはじめとして、語別の音便化率にあまり極端な変化は見られず、平家物語の一方流詞章においてはウ音便の増加傾向を顕著に見いだすことは難しい。

もちろんこれは天草版をはじめとするキリシタン資料の傾向を否定するものではない。現代においてキリシタン資料と同様の法則を持つ方言も報告されてお⁽⁹⁾り、資料の性格上多少の偏り、規範性は存するとしても、これに近い状況があったことは確かであろう。平家物語諸本は、やはり詞章を受け継ぐことが基本であって、語法等の面で成立当時の影響をそのまま反映したわけではないと考えられる。それを踏まえた上で、ある程度実態が反映するということになるだろうが、その場合、ウ音便化したものは古く、撥音便化したものは新しいというような差は考えられるであろうか。その一つの指標となる曲節は、若干ウ音便化したものに「中音」等古いアクセントを反映する曲節が見られるようにも思うが、目立つほどの差ではない。実際の語法との関連はまた別として、覚一本から尾崎家本への音便の変化は、一度天草版の如く極端にウ音便増加傾向を見せた後に再び撥音便が増加した、と考えるよりは、徐々に撥音便が増加する過程にある、と考える方が自然であろう。天草版は平家物語ではあっても、口語化をはじめとした大幅な文章の改訂のある点でその伝承とはかけはなれた位置にたつわけである。なお、上野氏の調査による豊川本では尾崎家本より更に撥音便化率が高くなっている。

ただし、写本でもって音便を云々することに加え、「う」「む」「ん」といった表記及びその音価の問題等も存するこ⁽¹⁰⁾と、もちろんである。しかし諸本間での一致率の高さ、語別の音便化率の傾向の類似といったものを考えあわせると、平家物語諸本がまったくでたらめな音便を記していたとも考えがたい。

2. 音節数

また従来、語幹末母音の他にバマ行動詞の音便に関する要素として挙げられるのが、動詞の音節数である。前掲大塚氏論文によれば、語幹が1音節の動詞（すなわち2音節動詞）に関しては、語幹末アイエオ列音でも撥音便を起こすことがあるというわけだが、これに関して平家物語は、覚一本で該当用例延べ52例のうちウ音便36例、撥音便8例、非音便8例、尾崎家本で該当28例のうちウ音便20例、撥音便4例、非音便4例と、むしろ3音節以上の動詞の場合よりウ音便化率が著しく高い。音節数別に音便化率を算出すると次の如くであって、用例のないエ列音と、ほぼ撥音便のみであるウ列音動詞を除くと、覚一本においても尾崎家本においても、2音節動詞のウ音便化率は非常に高いものになる。

		覚一本			平家正節		
		ウ音便	撥音便	非音便	ウ音便	撥音便	非音便
2音節	ア列音	88%	6%	6%	90%	0%	10%
	イ列音	0%	0%	100%	0%	0%	100%
	ウ列音	6%	91%	3%	0%	94%	6%
	オ列音	65%	21%	15%	65%	24%	12%
	計	45%	44%	11%	44%	44%	11%
3音節	ア列音	23%	54%	23%	8%	69%	23%
	イ列音	60%	0%	40%	100%	0%	0%
	ウ列音	3%	89%	9%	0%	93%	7%
	エ列音	0%	100%	0%	0%	100%	0%
	オ列音	3%	60%	37%	19%	72%	8%
	計	8%	73%	19%	10%	81%	9%
4音節	ア列音	50%	50%	0%	100%	0%	0%
	イ列音	0%	63%	38%	0%	100%	0%
	ウ列音	0%	100%	0%	0%	100%	0%
	エ列音	0%	100%	0%	0%	100%	0%
	オ列音	0%	38%	63%	0%	71%	29%
	計	8%	58%	33%	9%	83%	9%
5音節	ア列音	100%	0%	0%			
総計		24%	59%	17%	20%	71%	9%

3、会話文と地の文

キリシタン資料等の口語資料と平家物語等の文語資料の差という点も考慮し、音便について会話文か地の文か、またその発言者についてもチェックしたところ、「バマ行動詞+「て」「たり」」の、覚一本における会話文の用例は31例、尾崎家本におけるそれは25例と非常に少ない。その音便状況は次の如くである。

	ウ音便	撥音便	非音便
覚一本	10	17	4
尾崎家本	4	18	3

ウ音便形の発話者

覚一本——源頼朝、常陸房、平家の文の使い、妹尾太郎、小督、源義仲、平山季重、三井寺詮議、老僧、仏御前

尾崎家本——平家の文の使い、源義仲、三井寺詮議、老僧

撥音便形の発話者

覚一本——源義仲、北条、後藤実基、土佐守宗実、上総悪兵衛、大江匡房、荊軻、弘法大師、信連、梶原景季、手塚光盛、与三兵衛、平宗盛、平重衡、法然、高倉宮、法皇

尾崎家本——源義仲、後藤実基、荊軻、弘法大師、信連、梶原景季、手塚光盛、与三兵衛、平重衡、法然、高倉宮、法皇、平清盛、平重盛、能登殿、老僧、女院、公卿

非音便形の発話者

覚一本——女院（2）、六代の母、公卿

尾崎家本——女院、六代の母、祇王

音便の割合としては全体も会話文もほぼ同じで撥音便が多いが、発話者との関係を見ると、覚一本で女性の発話には撥音便のないことが目につく。すなわち、女性の発話は以下の通りであり、

仏御前 いとまをたふで（巻一・祇王）

小督 おしうで（巻六・小督）

女院 うらみたる（巻九・小宰相身投）

六代の母 まどろみたりつる（巻十二・六代）

女院 むすびて（灌頂巻・六道之沙汰）

女性はウ音便形か非音便形のいずれかを用いているのだが、逆に非音便形の用例

のほとんどが（比較的身分の高い）女性であるとも言える。共に割合の少ない非音便形と女性の発話が重なっていることは興味深い。また、尾崎家本では女院の「むすびて」が「むすんで」と撥音便化している他、覚一本で「恨て」と対象外だった祇王の台詞に「うらみて」という非音便形が現れ、逆に小督と仏御前のウ音便形は共に音便の起きる環境外に変化したため、結果として非音便形3例、撥音便形1例ということになったが、やはり非音便形と女性との関連はありそうである。なお、前稿における覚一本のハ行動詞音便に関する調査は非音便形が非常に多いため単純な比較はできないが、会話文155例中ウ音便42例、促音便13例、非音便100例、その中女性の発話はウ音便6例、促音便0例、非音便27例という結果が出ている。割合を考慮してもやはり女性は非音便形、すなわち原形を用いていることが多いと言えよう。次に多いのがウ音便という点も共通している。

4. アクセント

アクセントの類別と音便の種類に関して、類別のはっきりしている2音節3音節の動詞についてその割合を見ると、次のようである。

		覚一本			尾崎家本		
		ウ音便	撥音便	非音便	ウ音便	撥音便	非音便
2音節	1類	22%	72%	6%	13%	75%	13%
	2類	49%	43%	8%	47%	47%	7%
3音節	1類	5%	82%	14%	8%	88%	5%
	2類	23%	59%	18%	29%	64%	7%

2音節3音節いずれも1類動詞は撥音便化率が高いが、2類動詞ではやや下がり、特に連用形が低起式である2音節2類動詞はウ音便化率が撥音便化率よりも若干高い。2音節の低起式動詞の場合、語尾部分に上がり目が来るため、特殊音節の音便を起こしにくいであろうことは、前稿ハ行動詞の促音便ウ音便についての考察でも述べた如くであり、バマ行動詞の撥音便についても同様のことが考えられる。もちろんハ行動詞促音便が2音節2類動詞に見られなかったのとは異なり、バマ行動詞撥音便はかなり起こっているわけだが、そのほとんどは撥音便化率の高い語幹末ウ列音の動詞「組む」の用例であり、撥音便を起した動詞のアクセントは次の如くである。

くんで ○○▼ (422b 素声) (524b 口説)

(組て ○○▼ (拾))

すんだる ○●▼▼ (155d 素声)

低接式「たり」に接続した「住む」1例以外はすべて遅上がりとなって上がり目が後ろにずれ、特殊音節（この場合は撥音）と重ならない。ウ音便を起す動詞の場合は

読ふで ○●▼ (435a 下ゲ) ○○▼ (170a 口説)

(読で ○●▼ (240a 下ゲ) (108b 下ゲ))

等、遅上がりの他に早上がりの例が見られ、一応ウ音便と撥音便とのアクセント差が考えられるわけだが、口説の遅上がりの例を考慮すると、曲節差によるものとも考えられる。

なお、平曲譜本においては2音節2類動詞に従属式の助詞「て」に接続した場合、音便形では○●▼非音便形では○●▼との傾向が指摘されている。ここでは2音節動詞に音便形が非常に多く、かつそれが○●▼形を取る場合の多いことは上記の例からも認められるが、用例の少ない非音便形にアクセントを反映する譜記が見られないため比較はできない。

その他、

かこふだる ●●●▼▼ (551a 白声)

囲ンたり ●●○▼▼ (386d 口説)

の如く撥音便形で本来形をとり、ウ音便形でアクセント核がずれる例も見られるが、これも曲節差を考慮せねばなるまい。

まとめ

以上述べてきたことをまとめると、次のようである。

- ① 覚一本平家物語におけるバ行マ行動詞連用形の音便は語幹末ウエ列音動詞で撥音便を起し、その他の列ではア列音、オ列音、イ列音動詞の順にウ音便化率が高く、『玉塵抄』と似た傾向を示す。
- ② 尾崎家本平家正節では覚一本よりも全体的に撥音便化率が高くなるが、全体、個別の音便化率は①と似た傾向を示しており、覚一本から尾崎家本にかけては徐々に撥音便が増加していると思われる。キリシタン資料等の傾向とは異なり、緩やかな変化を見せる理由としては、なるべく古くからの詞章を受け継ごうとしていること等が考えられよう。
- ③ 語幹末ウエ列音の動詞を除くと、2音節の動詞に関してはウ音便化率が高い。

- ④女性の発話は非音便形、ついでウ音便形をとることが多い。
- ⑤連用形のアクセントが低起式である2音節2類動詞は他の動詞に比べて撥音便化率が低い。

注

- (1) 濱田敦氏「音便—撥音便とウ音便との交錯—」『国語国文』23—3（昭29）
- (2) 前田勇氏「近古末に於けるバ四・マ四の音便事情管見」『国語国文』23—9（昭29）
- (3) 大塚光信氏「バ四・マ四の音便形」『国語国文』24—3（昭30）
- (4) 辰野弘由紀氏「『玉塵抄』におけるバ・マ四段の音便形について」『二松学舎大学人文論叢』14（昭53）
- (5) 青木和江氏「天草版平家物語におけるバ行・マ行の四段活用動詞の音便について」『解釈学』2（平元）
- (6) 江口正弘氏「天草版平家物語の動詞の音便形について」『熊本女子大学学術紀要』42（平2）
- (7) 上野和昭氏「『豊川本平家物語』の音韻—音便を中心に—」『国文学研究』79（昭58）
- (8) 柳田征司氏『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院（平5）等
- (9) 藤田勝良氏「方言におけるバ行・マ行動詞のウ音便形の存立について」『佐賀大国文』20（平4）「動詞ウ音便について—バ・マ行五段（四段）動詞のウ音便を中心に—」『地域文化研究』11（平8）丹羽一彌氏「三重県志摩町布施田方言の音便形とバ四・マ四動詞」『信州大学人文学部人文科学論集』34（平12）等
- (10) 迫野虔徳氏「中世的撥音」『国語国文』56—7（昭62）等参照

数字は、欄の左が用例数、右は「それぞれの音便形の用例数/その動詞+「て」「たり」の用例数」によって算出した音便化率。空欄は用例が無いことを示す。

語幹末		覚一本						尾崎家本					
		ウ音便		撥音便		非音便		ウ音便		撥音便		非音便	
ア列音	あやしむ	2	100%		0%		0%						
	恨む		0%		0%	1	100%		0%		0%	2	100%
	しぐらむ	2	100%		0%		0%	2	100%		0%		0%
	たしなむ		0%	2	100%		0%						
	つかむ	2	100%		0%		0%		0%	2	100%		0%
	挟む		0%	3	100%		0%		0%	2	100%		0%
	ひらむ		0%	1	100%		0%		0%	1	100%		0%
	やむ		0%	1	50%	1	50%		0%		0%	1	100%
	うかぶ	1	50%		0%	1	50%	1	50%		0%	1	50%
	えらぶ		0%		0%	1	100%		0%	2	100%		0%
	賜ぶ	14	100%		0%		0%	9	100%		0%		0%
	並ぶ		0%	3	100%		0%		0%	2	100%		0%
計		21	60%	10	29%	4	11%	12	48%	9	36%	4	16%
イ列音	怪しむ		0%	1	33%	2	67%		0%	3	100%		0%
	惜しむ	3	60%		0%	2	40%	1	100%		0%		0%
	悲しむ		0%	4	100%		0%		0%	4	100%		0%
	くやしむ		0%		0%	1	100%						
	しむ		0%		0%	2	100%		0%		0%	1	100%
	謹む								0%	4	100%		0%
計		3	20%	5	33%	7	47%	1	8%	11	85%	1	8%
エ列音	哀れむ		0%	2	100%		0%		0%	2	100%		0%
	叫ぶ		0%	16	100%		0%		0%	8	100%		0%
	むせぶ		0%	1	100%		0%		0%	4	100%		0%
計		0	0%	19	100%	0	0%	0	0%	14	100%	0	0%
オ列音	困む	1	17%	4	67%	1	17%	1	33%	2	67%		0%
	黒む		0%		0%	1	100%		0%		0%	1	100%
	こむ	2	100%		0%		0%	2	100%		0%		0%
	そむ		0%		0%	1	100%						
	頼む		0%	5	100%		0%	3	75%	1	25%		0%
	どよむ		0%		0%	1	100%		0%		0%	1	100%
	臨む		0%	3	100%		0%		0%	4	100%		0%
	のむ		0%	1	100%		0%						
	まどろむ		0%		0%	5	100%		0%		0%	2	100%
	揉む	4	100%		0%		0%	1	33%	2	67%		0%

	読む	10	71%		0%	4	29%	5	71%		0%	2	29%
	あそぶ		0%	1	100%		0%		0%	1	100%		0%
	転ぶ		0%	1	100%		0%		0%	1	100%		0%
	忍ぶ		0%	3	38%	5	63%	3	75%		0%	1	25%
	飛ぶ		0%	6	100%		0%		0%	2	100%		0%
	まろぶ		0%		0%	3	100%						
	呼ぶ	6	100%		0%		0%	3	100%		0%		0%
	喜ぶ		0%	3	100%		0%		0%	5	100%		0%
	及ぶ		0%	1	100%		0%		0%	17	100%		0%
	計	23	32%	28	39%	21	29%	18	30%	35	58%	7	12%
ウ列音	うずむ								0%	1	100%		0%
	うむ		0%	4	100%		0%		0%	2	100%		0%
	くくむ		0%	1	100%		0%						
	組む	1	5%	21	95%		0%		0%	13	100%		0%
	沈む		0%	3	75%	1	25%		0%	3	75%	1	25%
	進む		0%	15	100%		0%		0%	10	100%		0%
	住む								0%	1	100%		0%
	たたずむ		0%	2	100%		0%		0%	1	100%		0%
	つつむ		0%	4	80%	1	20%		0%	2	67%	1	33%
	積む	1	33%	2	67%		0%						
	摘む		0%		0%	1	100%		0%		0%	1	100%
	盗む		0%	1	100%		0%						
	含む		0%	3	100%		0%		0%	3	100%		0%
	踏む		0%	2	100%		0%						
	むすぶ	1	17%	4	67%	1	17%		0%	7	100%		0%
	計	3	4%	62	90%	4	6%	0	0%	43	93%	3	7%
	総計	50	24%	124	59%	36	17%	31	20%	112	71%	15	9%

(おくむら かずこ・本学専任講師)